彙報

●史學研究會

小集 五月二十日(土曜日)午後一時より陳列館第一教室に於て、例會として小集を催し、左記の三氏の講演あり、午後六時閉會した。來會者九十餘名。

一、大教宣布と豫美國の問題　文學士　德重　淺吉氏

大教宣布の運動は古神道を國民全般に信奉せしむる宗教たらしめんとせしものなるが故に、先づ本尊を決定し、次に現當二世を貫く報應の理を作成した。然るに之は旨と平田神道により造化の神を立て、且つ幽界としての豫美國を月世界と斷ぜんとしたる爲め物議を醸し、平田神道は自然天外道に墮し夜見旋轉を說く神書兩部習合の新儀にして神敵反逆の邪教なりと攻擊せられ、大教宣布運動失敗の要因をなすに至つた。云々。

一、Cartouche に就て　文學士　岡島誠太郎氏

シャンポリオンのロセッタ石解讀に最初の鍵となつたカーツーシュは王名を表はすヒエログリフを圍繞して以て不朽に殘す謂であるが、始めは圓形であつたことは第二王朝ベスの夫で知られる。後に王名が長くなり自然長圓形と變じ所謂カーツーシュと云はれる態となつた。元來埃及王稱號は五個の主要部より成るが、カーツーシュの用ゐられるのは、普通名と卽位名とに限つて居る。これは古代埃及王の時代は素よりプトレミー朝も羅馬皇帝も紀元三世紀まで埃及に於て用ゐたが、その內容には各時代に應じて夫々變遷があり、自然、支配者の理想を伺はる點があつて興味を惹く所以である。云々。

一、ジャバ旅行談　文學博士　西田直二郎氏

はじめに、ジャバの風土、歷史の概說、および德川時代わが國人の此島に關して有した知識に就いての說明によつて聽者のこの島への關心を深めた後、諸地に於ける日本關係史料に就いて話をすゝめられた。

バタビアでは、現在日本領事館官邸に立つソーベーの墓の銘文の紹介より當時の國人の活動に及び、博物館において陶器の蒐集中 Japanisch Sake と記せる德利を見て酒の愛用せられたことを知り、又當市で蒐集された日本の貨幣の多きことに注意して、それが良質なる爲この地でも流通され後にまでも殘つた事情に心惹かれた。國立記錄局では豐富な史料が所長 Molisbergen 博士によつて整理されてゐる。加比丹が出島における、及び參府の途の記錄がまた世上の見聞をも傳へてゐることに注意し、我國の禁輸出品目錄にて國內事情を窺ひ、シーボルトの手記から彼の行動を知ることが出來る。尙次便のオランダ商船によつて舶載さるべき物品の註文書の詳細な品目からは西洋文物輸入の有樣が窺はれ、中には綾物註文書には色彩せる見本圖があり、又高島四郎兵衞より鐵砲の部分品を圖解註文せるものがある。又同市統計局長官 Odenkirchen 氏が加比丹 Bik の後裔と

して遺品を傳ふることを聞き、訪れて調査した中には、參府の途賜へる名所繪の一枚刷あり、又 Bik の手記には、時世の進展に伴ひ漸く變調を來しつゝあつた日蘭貿易の事情の反映せるものがあつた。尙一八四二年までの代々加比丹の在任中の貿易船數についての記載は加比丹名寄帳に見るよりも詳細で、日蘭商業史上便利なものと思はれる。

バンタムは同じく古くより我國に知られる所、その名にひかれて赴いたが、城壁崩れて廣き芝生となり、教會に附屬せる墓地には歷代長官の墓並び、又大第宅の跡より古の繁榮を偲ぶ外は無かつた。

東部グリッセーも亦東印度貿易の東部に於ける中心として活躍したが今はスラバヤに繁榮を奪はれ、古き大第宅は今は燕の巢の爲め保存され、その卵をとる土人の生計の資となつてゐる有樣である。云々。

◉京都帝國大學史學科國史專攻學生 伊勢名古屋地方研究旅行記

六月三日、初夏の早朝は雲一つなく爽々しい風が吹いて旅行の第一歩は實に朗らかである。西田教授はお差支への爲めお出でになられないので藤講師が引率され、一行三十九名、奈良電により六時出發、紫の朝靄に包まれた連山を車窓に眺め、奈良盆地を拔け、たゝなはる大和の青垣山に降り立つ狹霧をつき伊賀路に出でゝ一路神都に向つた。

伊勢山田に着くと佐藤、安齋、加藤諸氏の出迎を受けて直ちに外宮內宮に參拜した。神苑には老杉老檜蒼蒼として空を覆ひ、簡素淸淨な白木の宮居に森嚴莊重の氣が漂ひ襟を正さしめる。吾等暫し神前に額く。

內宮の參拜を終へて倉田山神宮文庫に車を走らす。神宮文庫は美しい芝生の丘に立つ淸楚な洋館である。既に天平神護二年頃の記錄に見えし內宮文殿と、鎌倉時代に創設された外宮の文庫としての豐受太神宮神庫とを父母として、貞享三年創立の岡田文庫後の林崎文庫、慶安元年創設の豐宮崎文庫及兩宮子良館、司家公文所等の藏書、並に合併、寄贈による圖書の集大成より成る。明治三十九年神宮文庫と稱し、大正十四年倉田山神宮皇學館の西南に現在の建物を建設した。藏書十萬餘、貴重書七千册に及んでゐる。先輩佐藤皇學館教授の御紹介で岡田氏の御說明ありし後、特に陳列された古書古文書を研究する。

天養二年の奥書ある源義朝の濫行停止を願ふ神宮領相模國大庭郷よりの愁狀は、平安朝末の社會動亂期に於ける社領と新興階級武家との關係を示せるものゝ一として面白く、陽明學の名著大鹽中齋の洗心洞劄記二册附錄一册を著作の年卽天保四年に自身奉納せしものを親しく見る。その他應永二十七年の新樂寺勅願寺たるの綸旨、奈良坂非人陳狀(寬文二年)等の古文書、古事記裏書注之一册(應永三十一年寫、文永十年卜部兼文註)日本書紀二册(慶長勅版本)日本書紀纂疏三册(弘治元年寫)弘仁私記二册法曹至要抄(永仁三年寫)御成敗式目抄(天正二年寫)古寫官

職名(永享五年寫)神風鈔(室町時代古寫傳荒木田氏經自筆)等の古書。列公自筆頭注ある大日本史に關しては『內宮江　進獻　大日本史　五箱　以上　水戸前中納言齊昭』とある進獻目錄、『水府前黃門源君御奉納　大日本史二百四十四册　安政四年丁巳三月』とある札が陳べられてゐた。限られた時間が迫り良き資料に心を殘し神宮皇學館で晝食をなして辭去する。

高田派本山專修寺へと向ふ。伊勢電鐵は伊勢海岸の松原を彼方に見ながら走る。綠の塀の樣に連つた松原が入江か河で少し切れると、新しく生れた濃藍色の海が瞬く瞳の樣にちらりと見えて、紫色に霞む知多半島が遠くに浮ぶ。月の夜の何を阿古木に啼く千鳥　と芭蕉の句や謠曲に名高い阿漕の浦も車窓一過、見學旅行の遽しさをつくゞ思つた。高田本山に着くとそよりともしない眞夏の晝の樣な暑い田舍道を五町餘歩いて專修寺に着く。寺は傳ふる所によれば親鸞上人嘉祿元年靈夢に感じて下野高田に道場を開き、信濃善光寺の阿彌陀佛の一體分身一光三尊の靈像を安置したのをその起源としてゐる。第十世中興の祖眞慧上人の時此地に下野高田專修寺を遷して本山とし、後土御門天皇の御世勅願寺となり天正二年門跡の稱號を許されて、本願寺に對立してその勢力中部日本に强大なるものがあつた。堂塔伽藍は正保二年火災に罹つたが寛文六年再建が完成して今に至つてゐる。唐門は彫刻色彩の巧緻に豐かでないが結構頗る豪壯である。御靈廟を拜して先づ堂舍を參觀する。本堂、開山堂、山門共に宏壯雄大であつた。本堂(阿彌陀堂)には眞慧上人が比叡山より將來した慈覺大師作と傳へられる一刀三禮の阿彌陀像が安置されてあつたが眼近く拜む事は出來なかつた。開山堂は桁二十四間梁間二十間單層入母屋造本瓦葺の大伽藍で內部の裝飾又華麗、正面に明治天皇御宸筆見眞の勅額を掲げてゐた。長い廊下を幾曲りもして寺寶の特別に陳列された室に入る。偶〻上杉谷大學長がお出でになられてゐる。松山師より出陳物に就いての一應の御說明を承けて後各自研究に耽る。覺如上人詞書の善信上人繪傳三卷は第一に吾々の眼を奪つたもので、西本願寺藏のものと共に此種の繪傳に於ける最古の形を殘してゐるとされ、『右絲起畫圖之志偏爲知恩報德不爲戲論狂言剩又馳紫毫拾翰林其昧尤捐其詞是荷付冥付顯有痛有恥雖然只惡後見賢者之取捨無顧當時愚案之紕繆而已。于時永仁第三曆乙未應鐘仲間第二天至于晡時終草了　執筆衡門覺如　今同歲大呂仲間第三天又書之』の奥書あり、親鸞の入信悟道への姿が簡素な筆で描かれてゐるのに興味を覺えた。問題となつてゐる顯智上人筆の法然上人傳法繪下一册に就いて同行の先輩井川氏より簡明な說明があつた。その他後柏原天皇御宸筆佛說觀無量壽經(文龜二、十一、八)及寫經添書、三十六歌仙の中三幅、唯信抄一卷(顯智上人筆)康元二歲正月二十七日愚禿親鸞八十五歲書寫之の奥書のある唯信鈔文意、親鸞御筆の見聞集、御消息等再び見難い貴重な資料を長時間に亙つて研究する事が出來た。かゝる重寶展覽の事は當寺破例の由と承つて我々の爲に特に拜觀の機會を惠まれたことに深く謝意を表したい。之れより、一身田流なる茶法を傳ふる茶

室安樂庵のある後苑に廻つた。溢昧のある空氣が漂つてゐて、竹編の門の處に竹の皮の草履の置いてあるのもゆかしい。珍奇な形の太鼓門を通つて專修寺を去る。驛に出でゝ此處で種々お世話になつた佐藤、加藤、安齋諸氏に別れ四日市に至り、バスに分乘して湯の山温泉に向ふ。正に沈まんとする夕陽の逆光に屋根を輝かして鈴鹿の連山は麓から濃藍色に暮れてゆく。長い田舍道を搖られ〳〵て漸次山に近づくにつれ窓から流れ込む風が冷くなつて來る。道を横切る栗鼠の可愛い姿にも山に入つた感を深くした。峽をわけて、嶙然として聳えてゐる御在所ヶ嶽の裾の宿に着いた時はもう灯が赤かつた。旅の疲れを湯に洗ひ落して皆寛ぐとき、所用を終へられた西田教授到着せられていよ〳〵賑やかとなる。

四日早朝温泉の傍を淵瀬となつて流るゝ三瀧川の溪谷を賞ずる暇なく湯の山を出發し四日市より名古屋に向ふ。反射鏡の樣な空から光が燦々と降つて來る。桑の若葉が沿線に美しい。洋々たる木曾の流れは深碧の水を湛らして棹をさせる船が販畫の樣だ。木曾川を渡ると名古屋も近い。名古屋に着くとバスを公園に走らす。青々とした芝生と小石を敷いた道に取り圍かれて金城はその均整のとれた雄姿を見せてゐた。慶長十五年家康の豐臣家に對する政略上西國大名に課し六百萬石を資として築いただけに、濠廣く石壘高く樓門堅固で名城たるの名を恣にしてゐる。加藤清正の繩墨による天主閣には金鯱の鴟尾の輝きを失はない。城廓としての構造は單純優麗で邸宅の樣式が到る處に見られた。石垣の石に加藤肥後守其他の刻銘があるのも興深い。天主閣を降りて御殿を拜觀す。玄關表書院對面所上洛殿黑木書院上御膳所梅の間等の各室に狩野探幽、興意の筆と傳へられ、又作者不明なれど狩野派の人の筆と思はれる襖障子杉戸等の繪の豪放雄渾な筆致、豐麗な色彩、複雜多樣な形態は桃山、江戸初期文化の豪華を物語つてゐる。土佐派の風俗繪は纖細優雅な線と色、複雜巧緻な梅岡に江戸の姿を現はし、吉田神社太元宮、葵祭の走馬、清瀧の清遊等の圖は殊に興味を惹いた。雄勁にして華麗な欄間を仰ぎ、玉座のある上洛殿の上段の間を拜し外に出でゝ大手門内の廣場で記念撮影ののち、金城を後にする。

日盛りを大須觀音寶生院に向つた。附近一帶が盛り場で雜踏の中を行けば、門前町の名も肯かれる。寺は建久年中聖德太子作の正觀音を安置して大須觀音と稱せしを起源とし、後大阪四天王寺の正觀音を移して本尊とし後村上帝の時勅願寺の宣旨を賜つて以來、寺運隆盛に向ひしが兵亂水難火災に屢遭つて今日に及ぶと傳へる。所藏の古典書は所謂大須本眞福寺本である。於勢州桑名郡内富津御厨小山勝福寺依難背仰付爲跡了　正中弍年八月十一日彼岸第三午尅了の奥書ある尾張國解文は藤原時代の筆跡をうつし、三十一條の彈劾、一一に興味を覺え、古事記（應安四年上中同四年下寫）古事記上卷抄（鎌倉末寫）本朝文粹（卷十四弘安三年寫）將門記（承德三年寫）口遊（弘安三年寫）續本朝往生傳（建長五年寫）弘法大師傳（元暦元年寫）珊玉集（第十二、十四卷天平十九年寫）日本靈異記三卷、七大寺年表二

卷(永萬元年)漢書食貨志一卷等名だたるの古寫本を研究した。同寺より直ちに七ツ寺に行く。

七ツ寺はすぐ近くにあり、直ちに本堂に入り佛像を拜む。本尊の阿彌陀如來は八尺五寸の木彫塗箔の座像である。均整のよくとれた豐麗なる相好、姿態、衣文の褶の自然さ、飛雲の華麗な光背等は藤原時代を示せるもので、玉眼を入れる鎌倉時代の手法が用ひられてあるのも見逃せない。脇士の勢至、觀音共に五尺五寸、本尊に比して粗放である。多聞天持國天が左右にあつたが金箔剝落してタツチは粗豪稚拙である。四千九百七十九卷の一切經及納櫃も見る暇なく、佛像も十分觀察の時なく建築物の見るべきも割愛して一宮妙興寺へ行く。

この頃より薄い夕靄が野の上に遠くから降り始める中を電車はひた走る。妙興禪林の石碑の傍より入ると掃き淨められた庭が禪寺の閑靜を思はす。少憩の後多くの古文書を研究する。綸旨院宣御教書諸證文集が古文書實習の一例として學生の興味を深うした。足利氏との關係文書頗る多く室町時代の寺領の組織性質を伺ふに足り、戰國諸侯の諸狀、寄進狀等見るべきものあり、國中無雙禪刹、國中無雙禪窟の勅額なも親しく見る。後奈良院御宸筆、後光嚴院御宸筆、東照太神君御親筆和歌、足利義教、豐臣秀吉畫像等の豐富なる珍藏品に接した。七時を過ぐるまで見學ののち一の宮に出で汽車に乘り換へ、疲れた身體を汽車に搖られて十一時半頃京都驛に着き、解散して各歸路についた。(大貫俊雄記)

●京都帝國大學文學部史學科

本學年講義題目

講義種別			毎週
國史			
普通	西田教授	國史概說(第一部)	二
	中村(直)助教授	國史概說(第二部)	二
特殊	西田教授	文化史研究の方法及問題(前學年の續き) 近世文化と都市生活(前記講義終了後)	二
	牧教授	日本法制史の基本問題	二
	喜田講師	日本歷史地理(第一學期)	(二〇)
	藤井講師	明治維新史(第二學期)	(三〇)
	藤講師	鎌倉時代史	一
	黑板講師	奈良朝史	(二〇)
	池內講師	南鮮上世史の研究(第一、二學期)	(三〇)
演習	牧野講師	室町季世史	二
	西田教授	日本精神の研究	二
東洋史			
普通	羽田教授	東洋史概說(第一部)	二
	那波助教授	東洋史概說(第二部)(第二、三學期)	二
特殊	羽田教授	東西交通史	二
	鷲澗講師	清朝興起史	(四〇)

宮崎　講師　宋代の黨爭　二
梅原　助教授　東西考古學　二
池内　講師　南鮮上世史の研究（第一、二學期）　（三〇）

演習　羽田　教授　東洋史の諸問題　二

西洋史

普通　原（隨）教授　西洋史概說（第一部）　二
時野谷　教授　西洋史概說（第二部）　二
特殊　原　教授　希臘史　二
時野谷　教授　シュレスウイヒ・ホルスタイン問題の推移　二
鈴木　講師　西洋中世史　二
岡島　講師　古代埃及史　二
濱田　教授　歐洲考古學　二

演習　時野谷　教授　D.P. Heatley: Diplomacy and the study of international relations.　一

原　教授　西洋史の諸問題　一

史學研究法

普通　原　教授　史學研究法　一

地理學

普通　石橋　教授　人文地理學概說　一
中村（新）教授　自然地理學概說　二
特殊　石橋　教授　交通地理學　二

小牧　助教授　地誌研究法　二
小野　講師　地圖發達史　二
喜田　講師　日本歷史地理（第一學期）　二
石橋　教授　外國地誌演習　二
實習　石橋　教授　地理學實習　一

考古學

普通　濱田　教授　考古學概說　二
特殊　濱田　教授　歐洲考古學　二
梅原　助教授　東亞考古學　二
島田　講師　南滿洲の考古學的遺跡（第三學期）　二

演習　濱田　教授　考古學演習　二
實習　梅原　助教授　考古學實習　二

副科目

中村（直）助教授　日本古文書學　一
藤　講師　史料講讀　一
上杉　講師　眞宗史（哲學科講義）　二
羽田　教授　東洋史籍講讀　一
那波　助教授　一
時野谷　教授　西洋史講讀 Weltgeschichte I. Abteilung Kaser: Die Neuzeit bis 1789　一
小牧　助教授　地理學講讀
a) T. Machatschek: Geomorphologie　二
b) Camille Vallaux: Mers et Océans　一

彙報

宮崎　講師　支那地理書講讀　一
金關　助教授　人類學　二
槇山　教授　地質學總論（理學部講義）　三
松下　助教授　地形學（理學部講義）　一
濱田　教授　地質測量學（理學部講義）　二
山本講師　考古學講讀　Peet: Rough Stone Monuments　一
Clarke教授　英語　Ashley Dukes: Drama　二
Certain Victorian poets　一
大山　講師　獨語　柏谷眞洋　獨逸小文典　二
雪山　講師　第一回　Rilke Rodin:　一
Fr. Hölderlin: Hyperion　一
落谷助教授　第二回

佛語
- Otchiai: Cours de grammaire française　第一回　二
- Descartes: Discours de la Méthode　第二回　二

希臘語
- Tanaka: Graecae grammaticae rudimenta　第一回　二
- Platon: Crito（哲學科講義）　二
- Herodotos: Selections from Herodotos　第二回　二
- Homeros: Iliad (XIII-XXIV)　二
- Aiskhylos: Prometheus bound　第三回　一
- Demosthenos: On the Crown　一

田中　教授
波多野教授
田中　教授

田中教授　羅甸語
- Tanaka: Nova grammatica latina　第一回　二
- Cicero: De Senectute
- Tacitus: Germania　第二回　二
- Ovidius: Selections from Ovidius　二
- Vergilius: Aeneis　第三回　一

徐講師
傅講師　支那語
- 最新官話談論篇　第一回　二
- 兒女英雄傳　第二回　二
- 儒林外史　第三回　二

十時　講師　露語
- Totoki: Kniga dlya chteniya　第一回　二
- Chekhov　第二回　一

黑田　講師　伊語　新編伊語讀本　二
篠原　講師　教育學概說（哲學科講義）（四〇）

●西洋史讀書會

昭和八年二月三日午後六時より三島亭に於て本年度卒業生送別豫餞會を開く。出席者二十七名。歡を盡して九時散會。

例會　岡島誠太郎講師並に二回生諸君の歡迎會を兼ね五月四日午後六時より樂友會館に於て開催、一同食堂に於て晩餐を共にしたる後左の講演を開き十時散會。出席者二十五名。

一、歐米の日本進出と幕末貿易の意義　文學士　杉本　克己君

時野谷、原兩先生教授御昇任祝賀會

時野谷、原兩先生にはかねて京都帝國大學に學位請求論文を

御提出中であつたが、此度教授會の審査を通過し文學博士の學位を得られ更に京都帝國大學文學部教授に御昇任になつたので、その祝賀の意を表するため五月二十七日午後七時より東洋亭に於て祝賀會を開いた。會する者三十四名に及び晩餐を共にし歡談一夕、西洋史學科のルネサンスを壽ぎ九時散會した。

●東洋史談話會

第三十回東洋史談話會例會

五月二十六日　午後七時　樂友會館にて開催

稻葉博士の講演あり續いて座談會

當日出席者　二十七名、閉會十時

（講演要旨）　歴史に徴するに支那の政治家は人望を得ることにのみ力め却つて國家の大計を誤るものが多い。輿論に逆行した爲奸物と罵られた人の中にも今から思へば立派な政治家がある。例へば南宋の秦檜の如き、金と戰つて勝目のないことを信じ主戰論者を彈壓した爲非常な非難をうけたが事實岳飛の北伐が成功を得る事は至難なりしと思はる。五代の馮道の如きも無節操漢と罵られ乍ら當時の人民に莫大な恩庇を與へたことを忘れてはならぬ。自分は一時も早く、人氣取を止め、排日の輿論を抑へ、民衆の幸福の爲日本と提携して國難を救ふ人が現在の支那に出現せんことを切望するものである。

第三十二回東洋史談話會例會

六月九日　午後六時半　樂友會館にて開催

演題

一、薛延陀の原住地に就いて　小野川　秀美氏

二、奉天故宮に現存せる殿版書目に就いて　秋貞　實造氏

當日出席者　二十九名　閉會十時半

（講演要旨一）　薛延陀が貞觀の初め金山西南から東遷する前既にオルコン、トラ、セレンガの三河地方に「延陀故牙」及び薛延陀の故國といふものが存する點に端緒を得て「金山西南」には却てこの三河地方から開皇末の騷亂の爲に移轉したのではあるまいかと推定するのである。

（講演要旨二）　二三ヶ月奉天滯在中見ることを得た奉天故宮博物館所藏の書籍は文溯閣の四庫全書と崇謨敬典二閣の老檔と西七軒樓に在るもの、三つが主である、とて寫眞でその實景を示された。なほ羅振玉氏の藏書のことにも言及せられた。

●夏期講演會

京都帝國大學に於て學術普及の目的を以て、毎夏開催される恒例の夏期講演會に於て行はれる史學關係の講演は左の通りである。（詳細は京都帝國大學本部に問合されたし）

現代歐洲の史的考察　文學部教授　時野谷常三郎氏

（八月一日—六日、毎日午前八時—十時）

西鶴の藝術　文學部助教授　穎原　退藏氏

（八月一日—六日、毎日午前十時—十二時）

科外講演（毎夜午後七時より）

プラトンの辯證法　文學部教授　山内得立氏（八月二日）

南滿洲に於ける考古學的遺蹟（幻燈使用）　文學部教授　濱田耕作氏（八月四日）

會報

◉寄贈交換圖書雜誌目錄

商業と經濟　一三の二　長崎高等商業學校
滿洲略史　駒井義明
考古學雜誌　二三の三、四、五、四八の三、四、同附五、六　考古學會
人類學雜誌　四の三　東京人類學會
史學研究　三六の四、五、六　廣島文理科大學
經濟論叢　二九、三〇、三一　京大經濟學會
史迹と美術　六一の四、五、六　史迹美術同攷會
歷史地理　三九の四、五、六　日本歷史地理學會
國學院雜誌　八の一、二、三　國學院大學
歷史教育　一八の四、五　歷史教育研究會
哲學研究　京都哲學會
史蹟名勝天然記念物　八の四、五　同　保存協會
史學雜誌　六四の四、五、六　史學會
民俗學　五の四、五　民俗學會
史學　一二の一　三田史學會
史潮　三の四　大塚史學會
信濃　二の四、五、六　信濃鄉土研究會
宗學研究　六　大谷派本願寺宗學研究會
尹文學士遺稿　京城帝大朝鮮史研究室
書誌學　一の三　書誌學社
社會經濟史學　三の二、三　社會經濟史學會
還曆記念六十年之回顧　喜田貞吉
經濟史研究　三九―四三　經濟史研究會
朝鮮史　第四編一―三　朝鮮總督府朝鮮史編修會
高麗節要　上中下　同上
國立北平圖書館館藏　六(Ⅰ)　國立北京圖書館
西洋中世史料及考證一、二　同大西洋中世史料及考證の會
西村眞次著日本古代經濟　交換篇市場　東京堂
西洋史研究　三　東北帝大西洋史研究會
國史學　一五　國學院大學國史學會
歷史と地理　三一の六　史學地理學同攷會
書香　四九　滿鐵大連圖書館
Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin.

◉會員動靜

◉入會

上京區小山堀池町九　深野方　三田村泰助氏
東洋史研究室　山本隆義氏
田中飛鳥井町一〇　宇野宮清吉氏
吉田中大路町吉田寮　若城久治郎氏
左京區淨土寺西田町三六　中村小十郎方　本田善自氏
左京區吉田二本松町二四　村上方　八木篤太郎氏
北白川西町六四　田中方　藤枝晃氏
吉田本町四　神崎方　岩永大亮氏
三重縣桑名町八幡町八　山本嘉十郎方　太田實氏
山梨縣日川中學校　清水巖氏
（以上井上智勇氏紹介）

◉轉居

上京區賀茂板倉町五　內田吟風氏
東京豐島區西巢鴨二丁目二三九三　岩橋小彌太氏
神奈川縣逗子町櫻山廣地一〇三九　鍋島直康氏
奈良市水門町　和田平一氏
沖繩縣那覇市外眞和志村女子師範學校　杉岡靈一氏

◉退會

辻村正吾氏
今井貞臣氏

◉死亡